

組織の新しいとらえ方

—— 組織記号論をめぐる諸論調 ——

大橋 昭一，竹林 浩志

I. 序—組織記号論の生成

近年、文系的学問の多くの分野では記号論に立脚した研究が盛んになっている。そうした研究には、マルクスの『資本論』における「商品」概念を対象にしたものもある（例えば文献 K1, K2；詳しくは Ω2）。こうした記号論的立脚的研究のなかには、少なくとも文系的学問ではすべての分野が記号論を基礎に展開されるべきとする主張すらあり、「記号論帝国主義 (imperialistic science)」的傾向とよばれているが (B1, p.107)，現時点ではどの文系的分野でも記号論的研究がありうるという状況になっている。

例えば最近では、「記号論資本主義 (semiocapitalism)」や「記号論的資本 (semiotic capital)」という言葉まで生まれている (G4, p.91ff.; cf. B2; G3)。また管理 (management) についても、アルゼンチン・ブエノスアイレス大学のサストレ (Sastre, R.) のように、2016 年に、パースの記号理論（詳しくは後述）とビジネス／マネジメントとを結び付けることは、まだ普遍的ではないが、その有効性ははっきりしていると述べているものもある (S1, p.202)。

本稿は、2000 年代になってから刮目すべき発展・展開をみせている組織記号論 (organizational semiotics) について大要の特徴点を明らかにすることを課題とする。組織記号論に関する問題が世界的に取り上げられるきっかけとなったのは、1960 年ユネスコの唱導のもとに「情報処理国際連合 (International Federation for Information Processing: IFIP)」が結成されたことに遡る。この IFIP において組織記号論を中心テーマにした第 1 回ワーキング部会 (IFIP TC8/WG8.1/Working Conference on Organizational Semiotics) が³、2001 年にカナダのモントリオールとケベックで開催されている（文献 I による）。

こうした方向における問題解明の世界的な先導者で最も有力な一人は、オランダ・トウェンテ大学／イギリス・スタッフォードシア大学のスタムパー (Ronald K. Stamper) とみられる。前記の IFIP の第 1 回ワーキング部会もスタムパーの主宰のもとに開かれている。本稿はこの点をふまえ、組織記号論の生成・発展の状況を考察するものである。まず次節において、スタムパーの所論を中心にして組織記号論の原理的大要を管見する。

ちなみに、前記の IFIP の第 1 回ワーキング部会の報告書において序文（文献 S2：以下では「2001 年報告書序文」という）を書いているのはスタムパーで、そこにはかれの考える組織記号論の原理的基礎

をなす部分が要約的に提示されている。本稿ではこの考察のうえにたって、続く後段において若干の論者について各論的な考察を行う。

結論を先に示せば、スタムパーらの組織記号論は、組織という協働の場において決定的役割をもつのは人間、すなわち人的アクターであり、人的アクターが受け取った記号をどのように理解・解釈し、定義するかが決定的要因になるとするものである。故に協働の場では、人間集団の社会的要因（社会的世界（social world））が最上位の地位を占めるとする。それはいわば人的記号論というべきものであって、物的要素は全く従たる地位にあるものとされる。

これは実は、記号理論のうえでいえば、フランスのラトゥール（Latour, B.）やイギリスのロー（Law, J.）などを中心に展開されているアクターネットワーク理論には反対の、対極的立場を主張するものである。ラトゥールやローらのアクターネットワーク理論では、例えば1台の走行している自動車を1つのアクターネットワークと考え、人的アクターと物的アクターとの一体的協働という視点の重要性を主張する。従って「アクターネットワーク理論は物的記号論（material semiotics）の1分野であり、かつ、社会と自然におけるすべての事柄について、それらが置かれている諸関係の網（webs of relations）を究明するものである」と規定される（L, p.2；詳しくはΩ1）。ここには、少なくとも“物的記号論”という言葉が登場している。

本稿では最後に、スタムパー説立脚的な組織記号論に対するこうした立場からの批判論も管見する。なお、参考文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

II. 組織記号論の基礎—スタムパー説を中心に

(1) スタムパー説の始点

スタムパーの「2001年報告書序文」（文献S2）によると、それまでに行われていたIFIPの国際的ミーティング（meeting）などでテーマとなってきたのは、主として「コンピューター記号論（computer semiotics：1996年、1997年）」であった。それが「組織記号論」として定着したのはおよそ1999年（アルメロでのミーティング）以来である。

このことからみても、組織記号論はもともと「コンピューター記号論」と言われてきたものであり、それが2000年ごろから組織記号論といわれるものになったと解される。ちなみに、スタムパーのこの「2001年報告書序文」をみると、その序文タイトルは「組織記号論：情報システムの科学の進展（evolving a science of information systems）」となっていて、組織記号論は、端的には、「情報システムの科学」ということになっている。

そこでまず第一に問題となる点は、「情報システムの科学」が何故記号論でなくてはならないかという点である。この点についてスタムパーは、前記の「2001年報告書序文」では、「何よりも第一にこの研究グループでは、記号は操作上間違いがなく、かつ根源的なものという考え方にたって、情報システムの科学を作り上げることに合意があったものである」（S2, p.xvi）

と述べている。

その際スタムパーは、「記号というものの概念上の強さは次のところに、すなわち、記号であるが故に解明されるものがあり、かつ、組織のなかで物事をなさしめるにあたって記号がどのように使用されているかについて、実例的に示すことができるというところにある」(S2, p.xvi)とし、「物事をなさしめること」すなわち管理上でも有用と論じている。

さらにこの点をスタムパーの別の論文(文献S3)でみると、「(いわゆる)情報(information)は曖昧でとらえどころのない(vague and elusive)概念である。これに対して工学技術的(technological)概念は精密にとらえることが容易なものである。従って両者には原理的に乖離があるが³、記号論は、記号論の概念を用いてこの乖離を乗り越えようとするものである。というのは記号は、情報概念にみられる不鮮明さがなく、(工学技術同様に)精密に(rigorous)作業することの出発点になりうるからである」(S3, pix-1: カッコ内は、他の断わりがない限り、本稿筆者のもの、以下同様)。

それ故に「(いわゆる)情報は、ある1つの科学の土台である基盤をなすのには不適当なものである。これに対し記号論で提示されている記号こそが、科学の前提になる(真の)情報・意味(meaning)・コミュニケーションなどについて頼りになる定義をする基盤となる」(S3, pix-2)ということになる。

さらに2000年のスタムパーらの論文をみると、「情報システムは、これをコンピューター土台的なもの(computer-based)と考えるのは賢明ではない。それよりも1つの(人間により構成されている)組織と考えるべきものである」とし、そして組織は、要するに記号で動いているものであると規定されている(S4, pp.2-4)。

では、スタムパーの拠り所とする記号理論はどのようなものか。それは、基本的にはアメリカの記号論者パース(Charles Sanders Peirce)により提示されているものであるが、ただしそれには一部において変更が必要なものとされている。

パースの記号理論は、記号現象を次の3者、すなわち、通常記号といわれるものをいう「レプレゼンテイメン(representamen)」⁴、それが示す実在の対象である「オブジェクト(object)」⁵、および、当該記号の受け手において表象されるものである「インタープレタント(interpretant)」⁶から成るとするものである(パースの記号理論の概要についてはΩ2-7を見られたい)。

これに対しスタムパーは、組織記号論では、これら3要素のなかでインタープレタントについて、それは“定義すべきもの(definiendum)”について“定義する(defien)こと”をいうものであり、かつ組織では、定義して実行すること、つまり“働くための定義(definition to work)”を含んだものであるから、これは(インタープレタントではなく)「デフィニション(definition: 定義すること)」とよぶことを必要とする。そしてこれら組織記号論の3要素は、次のように規定され、図1のような三角形で示されるものとする(S2, p.xviii)。

①レプレゼンテイメン: いわゆる記号そのものであるが、単なる記号そのものとは区別して「記号担い手(sign-vehicle)」⁷といわれることもある。スタムパー説ではこれは、操作的に提示可能

な安定的なパターンをなすものと措定されている。

②デフィニション：記号の受け手において象徴されるものであるが、定義されるべきものについて、受け手において定義したものと規定される。その際当該オブジェクトの構造に関連して定義が行われるもの（structure of objects in the definiens）とされる。

③オブジェクト：当該記号において指示されている対象をいう。それは操作的に提示されうるものであり、複雑ではあるが安定的な構造のものと措定される。

この場合スタムパーは、これら3要素のなかでも、組織記号論では体系上デフィニションが重用視されるべきものとしている。この点は、例えば組織記号論三角形においてデフィニションが頂点にあるものとされているところにはっきり表れているが、デフィニションは既述のように組織では「働くためのデフィニション」と措定され、組織では行動の起点をなすものと規定されている。故にデフィニションでは、それが現実の定義されるべきもの、すなわちオブジェクトと、リンクしたものであることが肝要と規定されている。

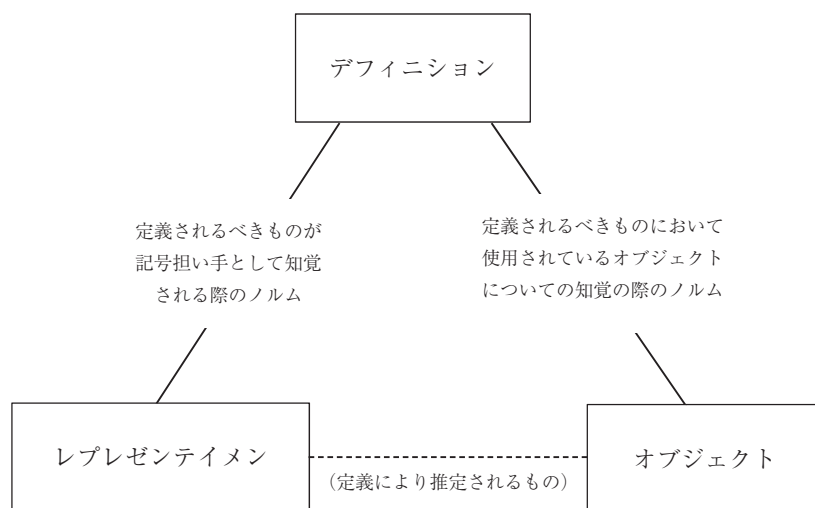


図1：スタムパーによる組織記号論三角形

(出所 S2, p.xviii)

(2) 組織記号論三角形の特色

以上のような組織記号論三角形の考え方は、その元になっているパースの所論とくらべると、どのような特徴があるであろうか。

この点でまず第一に注意されるべきことは、パース自身ではこのような三角形図示は一切なされていないことである (C1, p.13)。ところが記号論の分野では種々な論者によりいわゆる記号論三角形の図示がなされており、後述のようにそのなかにはパース説にたつ記号論三角形というものもある。しかし正確にはそれらは、当該作図論者により自らの記号理論に基づき作成され

たもので、パース自身により作図されたものではない。

ただしパース自身の記号理論で特徴的なことは、前記で紹介したかれの記号論3要素において順位 (hierarchy) があるとされていることである。すなわち記号論3要素では、レプレゼンテイメンが「第1次性 (firstness)」, オブジェクトが「第2次性 (secondness)」, インタープレタントが「第3次性 (thirdness)」に位置づけられている (H2, pp.192-198 による)。

このことは、換言すれば、パース説では記号現象は、ごく簡単には次のように、すなわち、記号そのものであるレプレゼンテイメンがまずあって、次にその実在物であるオブジェクトがあり、最後に記号の受け手におけるインタープレタントがあると解されているものと理解できる。そこでパース説は、ミンガース (Mingers, J.) / ウイルコックス (Willcocks, L.) によると図2のように表わされるものとされている (M, p.13)。この図では、パースのいう「第1次性」が三角形の頂点に置かれるようになっている。

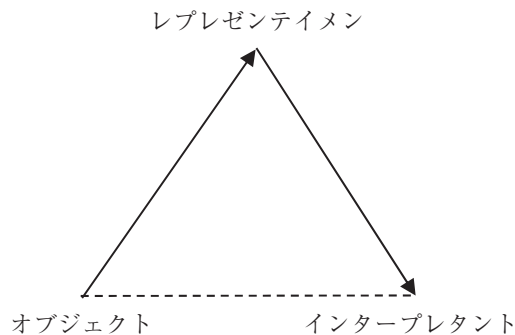


図2：ミンガース／ウイルコックスによるパース記号論三角形

(出所：M, p.13)

ただしミンガース／ウイルコックスの説では、内容的にもパース説とは異なったところがある。例えばパース説では“アイコン (icon：類像)”, “インデックス (index：指標)” および“シンボル (symbol)” は、オブジェクトすなわち実在対象のあり方とされているが、ミンガース／ウイルコックスではレプレゼンテイメンすなわち記号のあり方とされている (M, p.13)。

このことは別として、パース説を図示したというミンガース／ウイルコックスのパース記号論三角形と、スタムパー説の組織記号論三角形とを対比してみると、第1に強く目につくことは、パース説で「第3次性」とされているインタープレタントが、スタムパー説ではデフィニションとして三角形の頂点に立つものとされていることである。この地位は、ミンガース／ウイルコックスによるパース記号論三角形では、前述のように「第1次性」のレプレゼンテイメンとされているものである。

故にこのことから次のような結論的命題が導出される。すなわち、パース＝ミンガース／ウ

イルコックスの記号論説では記号そのもの（レプレゼンティメン）のあり方（例えば記号の作られ方等）を解明することが主題となっているのに対して、スタムパーの組織記号論説で解明の主題とされているものは、インタープレタントにあたるデフィニションであって、記号の解釈・受け取られ方・使用のされ方こそが解明の主題とされていることである。ここに記号論一般にはない、スタムパーら組織記号論の原理的特色がある。つまり組織記号論では、記号そのものがどのように作られるかではなく、作られた記号（例えば職務規定における定めや上司の命令・指図など）が、組織のなかで個々の組織構成員によってどのような意味のものとして受け止められ、定義されて実行されるかが第1の解明課題となるのである。

それ故、第2に注目されることは、少なくともミンガース／ウイルクックスのパス記号論三角形では、ある意味で当然ながら、（実体上記号現象の出発点である）オブジェクトと、（記号現象の最終結果である）インタープレタントとの関係が推定的なものとされ、図では点線で示されるものとされているのに対して、スタムパーの組織記号論三角形では、そもそもの出発点であるレプレゼンティメンすなわち記号そのものについて、オブジェクトすなわち実在対象物との関係が推定的なもの、つまり点線で示されるものとして提示されていることである。すなわち、記号そのものが最初において実在と離れているかもしれないと措定されるが故に、記号の受け手においてデフィニションをして、記号の意味を解釈・定義し確定すること、すなわち記号の受け取られ方が最も重要な問題となることになる。

この点はさらに、組織記号論では、デフィニションにおいて、単なる記号の認識ではなく、認識に基づく行動が肝要とされることにより、さらに幅広く、かつ奥深いものとなる。

ここでさらに、第3に注目されるべきことは、スタムパーが組織記号論で対象となる現実（reality）について、それは究極的には、あくまでも社会的構成（social construction）というものであることを力説していることである。ただしスタムパーの「2001年報告書序文」では、次のように述べられるにとどまっている。すなわち「個人的に私は、現実にある一部のものについて客体論（objectivist）的立場をとり、残りについて社会的構成論（social constructivist）の立場をとるものに対し、大きな不快の念を感じてきた」（S2, p.xvii）。

そこでこの点について、当時のスタムパー説について解説的論文を著作しているオランダ・グローニンゲン大学のガツェンダム（Gazendam, H.）とイギリス・リーディング大学のリュー（Liu, K.）がどのように記述しているかをみると、「スタムパーはかなり徹底した主体主義（radical subjectivism）という哲学的立場をとっている」のであり、そこでは「現実とは常に、社会的過程を通じてなされる人間相互の交渉・作用によって形成され変化してきたことが主張されるものである」と特徴づけている（G1, p.3）。

このうえでスタムパーにより提示されている組織記号論の土台をなす「組織記号論的段階（もしくはフレームワークあるいはラダー：semiotic framework：semiological ladder）」（S2, p.xxiii；S3, p.ix-2）をみると、次のようになっている。これは記号のあり様（property）を示すもので、段階的には①→⑥の順

で高位のものとなり、「社会的なもの」が最高位にあるものである。通常、図3のように示される。

- ①物的なもの (physical)：意味的内容を問わず、物的な点のみが問題となる段階。例えば信号。
- ②経験されるもの (empiric)：流れのなかでとらえることが肝要なもので、継続的反復的データが意味を持つもの。例えば年齢、身長、エントロピーなど。
- ③統語体的なもの (syntactic)：言語、論理、数的モデル等で、形式的構造が問題となるもの。
- ④意味論的なもの (semantic)：意味 (meanings)、命題 (proportions) 等で、形式よりも内容が問題となるもの。
- ⑤プラグマティックなもの (pragmatic)：行為の際の意図などで、実際行為において有効性がわかるもの。
- ⑥社会的世界 (social world)：信念 (belief)、コミットメント (commitment)、満足 (satisfaction) あるいは規則や法令 (law) などに示されているもの。

人間情報機能		社会的世界
		プラグマティックなもの
		意味論的なもの
IT プラットホーム	統語体的なもの	
	経験されるもの	
物的なもの		

図3：組織記号論的段階

(出所：S3, pix-2; ただしここでは F.p.2 による)

この6つの区分は、パースはじめ通常の伝統的記号論では、記号論の分野について統語論・意味論・プラグマティック論に区分されているものに相当する。これがスタムパーでは6分野に拡大され、しかも「社会的世界」が最高位にあるものとされているが、これはいうまでもなく、組織とは何よりも、複数人間同士の文書上のものを含んだ、かつインフォーマルなものを含んだコミュニケーションの関係と規定されることに基づく (N1, p.44)。

ちなみに、アイルランドのゴールウェイ・メイヨー工科大学のコステロ (Costello, G. J.) は、2016年の論考で、シュナイダー電機会社関連企業における実態調査に基づく、この「組織記号論的段階」においては、上部の「人間情報機能」と下部の「IT プラットホーム」との間に、1つの「中二階的な仲介段階 (mediation mezzanine)」があると考えた方がいいと提議している (C2, p.14)。

この点に関連して看過されてならない第4のことは、前記のスタムパーによる組織記号論三角形 (図1) では、頂点のデフィニションが作られる元になるものは、レプレゼンテイメンからの

場合も、オブジェクトからの場合も、いずれも「ノルム (norm)」というものであるとされていることである。つまりデフィニションは、記号そのものであるレプレゼンテイメンとの関係でも、その実在対象であるオブジェクトとの関係でも、ノルムとして確定されるものである。ちなみにこれに対し、レプレゼンテイメン—オブジェクトの関係は推定的なものとされている。

この点について、スタムパーの「2001年報告書序文」では特段に言及されているところはなく、いわば自明のように扱われている。そこで先に典拠した2003年のガツェンダム／リュの解説的論文をみると、スタムパー説では「組織は、人々の行動を規定する文化的小および法的なノルムという観点でとらえられるものとされている。…組織など共同体ではなされるべき行動についての知識は『共有された知識 (shared knowledge)』として蓄積され、それが社会的ノルム (social norm) として機能するものと措定されている」と書かれている (G1, p.6)。

ところがこの点についてガツェンダム／リュは、同ページ脚注において、社会的ノルムについてのこうしたスタムパーの理解・概念は、通常一般的に使用されているこの用語の使い方とは異なったものである、とわざわざ断っている。

これは本稿筆者のみるところ、ひとつには、スタムパー説では、ノルム概念の基礎に「アフォーダンス (affordance: 余裕)」の考え方があるところからくる。アフォーダンスは、もともとギブソン (Gibson, J.J.) が提起した概念であるが (文献 W), 要するに、この世界で人間が活動し生活してゆくためには、あるいはそれができるためには、物的領域でも社会的領域でもさしあたり変わることがないとして (invariant) 予定できる一定のものの存在することが前提になることをいう。例えば物的領域でいえば太陽や空気存在などであり、社会的領域では最低限の社会的分業の存在などである。

これが要するにアフォーダンスであるが、スタムパーなどの組織記号論では物的アフォーダンスも、人間にとって、それは結局、人間の知識となつてはじめて有用なものとなるから、人間の知識活動、すなわち社会的なものとして現れるのであって、それは記号のデフィニションにおいていわば根本的前提として、すなわちノルムとして機能するものとして現れるとみるのである。こうした意味ではスタムパーらにおいてノルムといわれているものは、通例的に例えば「規範」といわれるような強い意味のものではなく、当然の常識的な行為前提というべきものと解される。本稿では原語のまま「ノルム」を表記している。

スタムパー説を中心にした組織記号論の序論的大要は以上とする。次に、各論的なものとして最初に、前記で紹介済みのガツェンダムとリュにジョルナ (Jorna, R. J.) を加えた3名による2004年の論文 (文献 G2) をレビューする。これは同年開催の「シェルと空間構造に関する国際会議 (International Association for Shell and Spatial Structures: IASS) の大会におけるラウンドテーブル『異文化交流とグローバリゼーション (Interculturality and Globalization) についての組織記号論の見解』」における報告論文 (以下では「2004年 IASS 報告論文」という) である。この論文はもともとこうした観点からのものであることが充分考慮されるべきである。

III. 組織記号論の3つのアプローチ

この「2004年 IASS 報告論文」において注目されることは、なんといっても、スタムパー説にたつガツェンダム／ジョルナ／リュウの3執筆者が、組織記号論には3つのアプローチがあることを提起していることである（以下は文献 G2 による）。

まずこれら3執筆者は、組織記号論でいう組織とは、「望ましい行動について共有した知識を有し、そしてこの知識の社会的構成（social construction）に参加する人々の共同体（community）」と規定されるとし、こうした組織において変化やダイナミクスを生むためには、次の5者（課題）が必要であるとする（G2, pp.2-3）。

- ①進化の時代に適した行為（behavior）のパターンの普及。
- ②記号の交換に基づくコミュニケーションの進展。これにより自己組織的な認識的なシステムと社会的システムにおいて進化的変化が生まれる。
- ③社会的アフォーダンスおよびそれに付着している社会的ノルムについて創造と（必要の場合の）廃滅（annihilation）。
- ④行動（action）の振興。例えばコミュニケーション行動や、情報システムの設計・創造・変化等。
- ⑤人間的認識的システムを次の点で機能させること、①制約された合理性という状況のもとにおける問題解決、②学習、③コミュニケーション的行動。これらにより知識の創造・変化・転換・移転が生まれる。

これら5つの課題に応えるために、組織記号論では3つのアプローチがある。上記の考え方のうち①②に応えるものが「システム志向的アプローチ（system-oriented）」、③④に応えるものが「行為志向的アプローチ（behavior-oriented）」、⑤に応えるものが「知識志向的アプローチ（knowledge-oriented）」である。

第1の「システム志向的アプローチ」は、メディア（例えば、話された言葉、テキスト、文書、コンピュータ・インタフェースなど：このカッコは原著のもの）を記号システムとしてとらえ、これらのメディアが人々の話しや解釈においてどのように用いられているかを解明する（G2, pp.3-4）。つまり、コミュニケーションとメディアを究明するものである。このシステム志向的アプローチは、次の4者に分かれる。

- ①「システミック記号論（systemic semiotics）」：システミックな機能的言語、社会的記号論および組織理論からの諸要因を適用することに志向するもの。
- ②「ダイナミック記号論（dynamic semiotics）」：働きのなかでなされる人々のコミュニケーションの分析に焦点をおくもので、何がなされているか、何がなされるべきかを示すもの。
- ③「進化的アプローチ（evolutionary approach）」：組織そのものや仕事上のネットワークを全体として（as a whole）とらえ、ダイナミック性を究明するものであるが、その際戦略に焦点をおくもの。

- ④「システム理論的 (systems-theoretical) アプローチ」: 上記の③と同じ基本趣旨にたつものであるが、その際記号交換を通じて行われる相互活動システムにより生まれる双方向的影響の究明に焦点をおくもの。

第2の「行為志向的アプローチ」は次のような根本原理にたつ。すなわち、知識はすべて、その所有者であるアクターがあるものであるから、すべての知識はアクターの行動を伴ったものである。故にこの世におけるすべての事柄はアクターの考え・判断に依存するものであって、この世界は客体的な (objective) ものではなく、主体的なものである、と考えるものである。これは現在 (2004 年)、組織記号論のなかで最も主流的な考え方である。次の2者に大別される (G2 pp.4-7)。

- ①「情報フィールドを土台とした (information field based) 組織記号論」: これはスタムパー説の中核を成すものである。まず情報フィールドとは、前記で一言した共有された社会的ノルムが1つのセットになっている場所と規定されるが、こうした共有された社会的ノルムはそのコミュニティではコンセンサスが得られているものであるが、他のコミュニティでは別の社会的ノルムがあるかもわからない。つまり社会的ノルムはコミュニティのいかんにより異なるものと考えられる。

他方、一人の人間 (person) は、通常1つのコミュニティだけに属するのではなく、例えば家庭や企業、地域社会のように複数のコミュニティに属している。すなわち異なったコミュニティに同時に属している。つまり同時に異なった情報フィールドのもとにある。このことは一般に “Umwelt (ドイツ語で「環境」や「周りの世界」の意味する語、ここでは「ウムヴェルト」という)” といわれるが、一般的には情報フィールドはこうしたウムヴェルトのもとにあると考えられる。

その一方、ガツェンダムらによると、このアプローチでは、結局、組織として問題となる中心的なものは「ビジネス」の領域であって、ビジネスの「システム分析」, 「意味論的 (semantic) 分析」, 「ノルム分析」が枢要性をもつとされる。

- ②「相互作用構造を土台とした (interaction structure based) 組織記号論」: これは、記号論のなかでも「言語行動論 (language action perspective)」に根源があるもので、言語行動のアクターが人間であるから、人的アクターが組織のエージェントとされるとともに、組織自体も1個のアクターとみなされる。情報システムは、行動能力を持った組織記号論的な人工物 (organizational sign artefacts with action capabilities) と規定される。それ故ガツェンダムらは、「この情報システムについての考え方は、情報システムの純粋に代表的な考え方 (purely representational view) を超えるものであり、これでは情報システムが当該組織の1つのエージェントとして機能することが出来るものという考えになる」と特徴づけている。

第3の「知識志向的アプローチ」は、ネウエル (Newell, A.) やサイモン (Simon, H. A.) により代表されるものである (文献 N2)。まず知識について、人間の心のなかにおける記号 (シンボルなど記号担い手を含む) の構造であるとするが、これが人間行動の根源になると規定される。このアプロー

チで注目されることは、知識の構造化や会話等により知識の移転や転換が起きるとして、それに着目し、感触的な (sensory) 知識の段階からコード化 (coded) された知識への進展、さらには理論的な (theoretical) 知識への発展について理論的過程を提示していることである。なおこのアプローチには、組織についての「多数アクター・シミュレーション・モデル (multi-actor simulation models)」も含まれるとされている (G2, pp.7-9)。

以上のうえにたつてガツェンダムらは、結論として、組織記号論の所説はこのようにアプローチが多様なものであるが、次の3点では共通点があるとしている (G2, p.9)。

- ①記号論的伝統を研究推進の根源としていること、
- ②研究対象を組織においていること、
- ③研究の焦点 (focus) が同じところにあること。

ただし理論源泉となっているものは、主として次の2者、すなわち①パースやモリスなどの記号論と、②ハーバーマスの言語行動理論 (language action theory) であって、記号論のなかでもソシュール、グレマス、エコー、パースなどはそれほど大きな役割を果たしているものではないと結んでいる (G2, p.9)。

ガツェンダム／リユー／ジョルナの所論は以上とし、次に組織記号論の実践的モデルというべきものを考察する。

IV. 組織記号論の実践的モデル

(1) EDA モデル

まず取り上げるのは、フィリペ (Filipe, J.) /リユーが提起している「組織記号論のEDAモデル」といわれるものである (文献F)。ここでEDAモデルとは何かについて、前書的に一言すると、組織記号論では、組織は社会的ルールである社会的ノルムから成り立っているものと考えられるが、社会的ノルムは次の3要因 (components)、すなわち①認識論的なもの (epistemic)、②義務論的なもの (deontic)、③価値論的なもの (axiological) から成るとするもので、この3者の頭文字から“EDAモデル”といわれる (cf. J, p.440)。

まず記号論が良しとされることについては、これまで情報システムの中核的概念とされてきた情報は、概念上複雑極まりないもので、定義が不精密のものであるから、それらは、記号論という記号のような基本的に確固たる概念のものに置き換えられるべきであるとされ、その際採られるべき哲学的スタンスは、徹底した相対主義的なもの (radical relativistic) であって、現実はいずれも客体的なものという考え方は否定される。つまりここで前提されているものは、組織的エイジェントの行為は社会的次元が最高位にたつものであって、相対的な自律性 (autonomy) があるという考え方にたつものである (F, p.1)。

このうえにたつてEDAモデルは、基本定式的には、次のように説明されるものとする。す

なわち、(組織における)力関係 (power relationships)、役割 (roles)、約定 (contracts) などは、EDA 要因という観点に基づくノルムによって規定されるものである。つまり、「エージェントは行為にあたって知識に立脚するのであり (認識論的要因: このカッコは原著のもの)、その際それぞれが持つべき義務 (obligation) と権能 (authorization) を考慮に入れてそうするのであり (義務論的要因: 原著のカッコ)、そしてこの過程でそれぞれのものは、それぞれが持つ価値体系に基づき選択的な行動を行うものである (価値論的要因: 原著のカッコ)」。

ただし具体的にはこの過程は、次のように進むものと指定されている。すなわち、この場合エージェントは自律的存在で、しかも「制約された合理性のもとにおいて個々の効用を最大とするよう行動がなされるものであり」、それぞれが持つ価値的なもののいかんに応じて動くものであるから、義務違反を選択することがありうるものである。つまりノルムには、このようなものとして現れる可能性があるものとされている。

以上の原理的説明のうえにたってフィリペ／リユーは、ノルム 3 要因は図 4 のように示されている (F. p.6)。これによると、組織における人間行為は、最終的には (多くの部分が) 義務的要因により決まり、(一部が) 価値的要因により決まる。ちなみに、EDA の考え方は、既述で一言した 2000 年のスタムパーらの論文にすでにみられる (S4, p.7)。

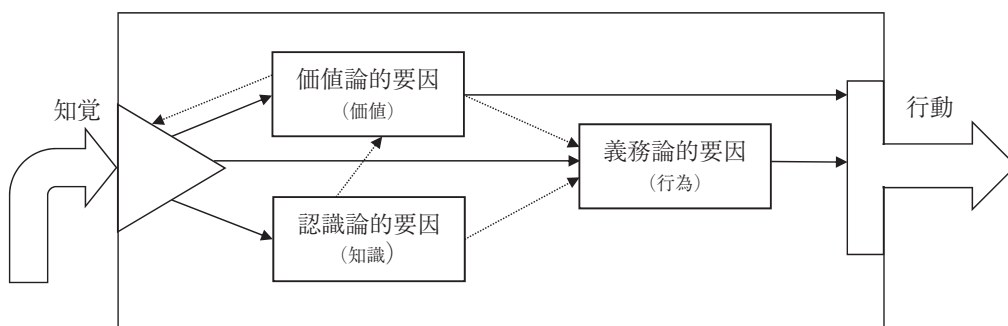


図 4: 組織記号論の EDA モデル

(出所: F, p.6)

次に取り上げるものは、こうした行為過程をウムヴェルトの考えや BDI 理論 (人間行動は Belief, Desire, Intention により説明されるとするもの) をも考慮に入れて、組織記号論の根本的前提をなす社会的構成物について論究しているヘルムフート (Helmhout, M.) / ガツェンダム / ジョルナの論文 (文献 H1) である。これには組織記号論の実践局面が包括的に提示されているとみられる。

(2) 社会的構成物の規定

ヘルムフート / ガツェンダム / ジョルナは、「組織記号論では、組織において人々の行為を導く代表的なもの (representations) は、社会的構成物 (social constructs) という概念で示されるもので

あり、…社会的構成物は、組織において共有されている知識が、効率よく抽象化されたものである」(H1, p.2)と提議し、かつ、「社会的構成物は社会的アホーダンスでもある」とするとともに、「社会的構成物はノルムから成るものであって、正しい行為を推奨し、賞罰を決めるもの」(H1, pp.2-3)と規定している。このうえにたって、社会的構成物には次のような特性があるとする。

第1に、「社会的構成物は、合意されている社会的な行為がどのようなものかを決定しているものであるが、しかし個人的な行為についてはそのすべてを決定しているものではない」(H1, p.2)故に実際の組織において行為基準となっているものは、個人的なものを含んだ社会的構成物であり、これは要するに、前記で一言したウムヴェルトといわれるものであるとしている。

第2に、社会的構成物は、本来、生成・発展・展開・消滅の過程をとるものとされる。ヘルムフートらの弁によると、「社会的構成物にはタイムスパンがあり、次の4段階がある。すなわち、生成／制定、発展 (evolving)、展開 (controlling)、消滅 (ending) の局面である。行われてきた過程の終わった後には、新しいものをめぐる交渉がある。それは、なんらかの合意 (agreement) ができるまで続く」(H1, p.6)。

そこで第3に、社会的構成物の進展過程では、組織のアクターは次のように考えられるべきものとされる。すなわちそれらは、自律性があるものではあるが、しかしそれには、選択上において制約 (limits) があり、全く自由というものではない。そこで他方では、関連するすべての局面をモデルにした理論が必要であるが、それはBDI理論が最適と考えられるものである (BDI理論については文献R参照)。これは、ヘルムフートらによると、「BDI理論には、この世界を知覚し、例えばいつインテンションが発揮されるべきかの決定において強いメリットをもつものであるからである」(H1, p.8)。

この場合社会的構成物は、関連ノルムとして現れるものである。その際、どのような精神的態度が必要であるかを定めるものもBDI理論であるとされ、組織記号論でBDI理論に立脚したところのアクターの意思決定過程は、ヘルムフートらによると、図5のように示される。ただしこの図は、BDI理論に基づくものと同じものではない。というのは、ヘルムフートらのこの図では、信じること (belief) は真の (true) の知識をいうものであるが、BDI理論では真であるか否かも信じることのいかにとされているからである。また望むもの (desire) は、この図では、信じることから生まれる「オプションのいかに」に依存するものとなっている。さらにインテンションは、その時点で解決せんとする「スケジュール化された行動目標」というべきものとされている。

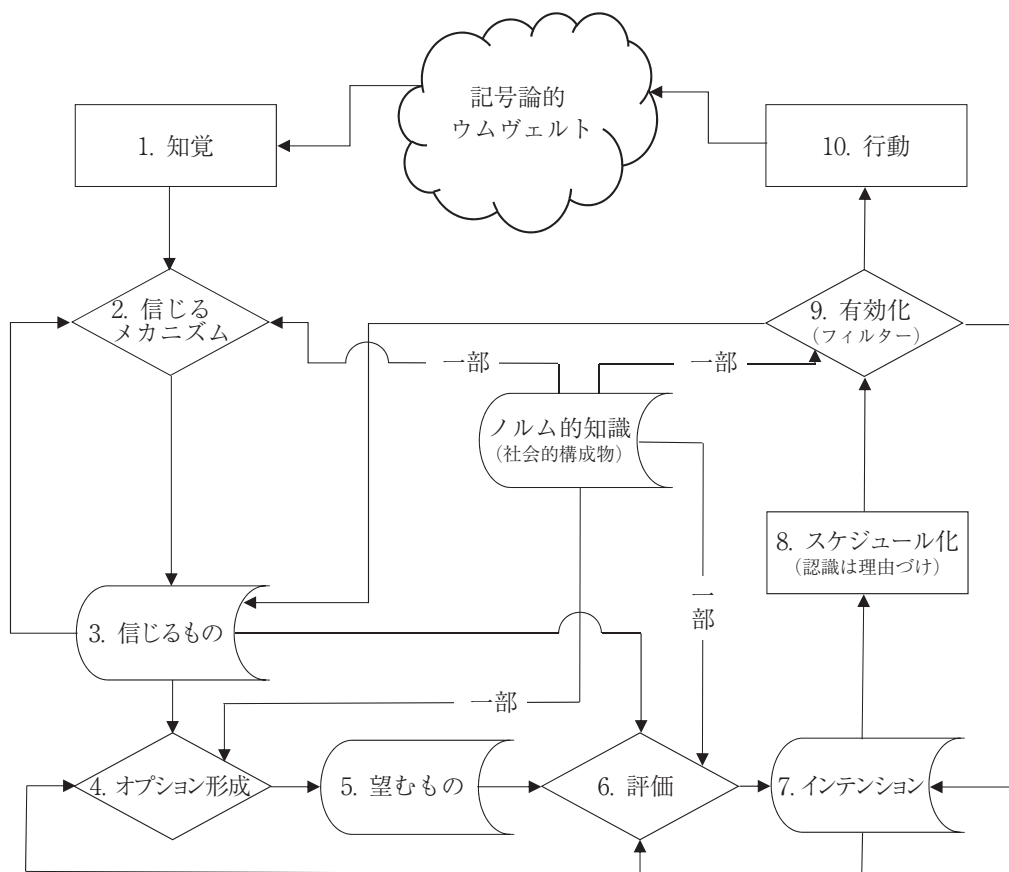


図5：ヘルムフート／ガツェンダム／ジョルナによる社会的構成物の図式

(出所：H1, p.10)

ヘルムフート／ガツェンダム／ジョルナの所論は以上とし、これらスタムパー説に根拠をおく組織記号論の諸説に対して、根本的批判を提起しているヘルシンキ大学のピエタリネン (Pietarinen, A.: 文献P) の所論を次にレビューする。なお次節に限り、スタムパー説的組織記号論の諸説は、一括して“組織記号論説”という。

V. “組織記号論説” に対する批判論

ピエタリネンが自らの説の根本的立脚点としているものは、「現在組織論の理論的要諦は、組織についてプラグマティックな考え方と記号論的な考え方 (pragmatist and semiotics) をとるところにある」をいうものである。このうえにたってピエタリネンは、本来、組織記号論で論究されるべき点には次の4点があるという (P, p.2)。

①そもそも情報システムの科学 (science of information system) が記号理論から形成されるとすると、

それはどのようにしてか (how)。

- ②人間組織において記号がなしうるもの、そして記号が物事をなさしめるために用いられる仕方は、どのようにして明らかになるものか。
- ③記号の使用に依存する社会構成主義理論では何が真で、何が誤りであるかが究明されること。
- ④記号が状況上で当然の代表物という考え方と一致する理論で、成功的なものにはどのようなものがあるかを究明すること。

ところが、ピエタリネンによると、“組織記号論説”の現在の研究方向は、情報システムを社会的組織の記号論としてとらえようとするものであり、従ってなかならず、「組織記号論説」で最上位の概念として提示されている社会的なもの (the social) というものは、組織の意味論的 (semantic)、かつプラグマティック論的な行き方にとっては不要なものであり、余分なもの (superfluous) である」と強く批判する (P, p.1)。

ピエタリネンは、方法論的には“組織記号論説”における考え方は、一般に社会構成論 (social constructivism) といわれるものよりも、現象志向性が強く、本来の社会構成論には入らないものであって、“社会構成主義論 (social constructionism)”といわれるべきものである。しかも「両者は両立しない」というのである (P, p.6)。

理論の社会的役割についていえば、“組織記号論説”は、経済学でいえばネオ・クラシックな理論に代わるもの (alternative) として、あるいは、工学技術 (technology) を説明する哲学にあたるものとして登場せんとしているものであるが、ピエタリネンによると、「現在主流である考え方 (mainstream assumption) からは、基本的に離れてしまっているものであり、…これまでの伝統から背離しているものであるから、…こうしたものが無批判的に受け入れられている理由が、私にはわからない」というものである (P, p.6)。

結局、ピエタリネンが主張している立場は、記号に関与するものには人的アクターと物的アクターとがあり、組織行動は本質的に人的アクターと物的アクターとの協働 (interaction) と考えるべきであるというところにある。これはアクター・ネットワーク理論の立場からは当然の主張であり (文献 Q1 参照)、“組織記号論説”のように、これに反し、人的アクターが上位を占めるものとして考えるのは、根本的な誤りということになる。しかし、本稿冒頭で述べたようにスタムパーでは、こうした考え方は何よりも“不快の説”として排斥されているものである。ピエタリネンは、こうしたスタムパーはじめ“組織記号論説”に反論を提起しているのである。

この点をピエタリネン自身の弁でみると、かれは「記号に関連するものは人間だけと考えるのは、誤りであり」、「それは相互協働 (the interactive) と社会的なもの (the social) とを混同したものである」としたうえで、「記号の意味とその展開について、情況志向的な、使用中心なプラグマティック主義的な考え方をとるものにとっては、現実について主体中心的に考え、それを少なくとも社会的文化的にのみ構成されていると見るものなどは、否定されるべきものとなる」と宣している (P, p.10)。

このうえにおいてピエタリネンは、“組織記号論説”に対する批判を具体的に提起しているが、本稿では次の4点のみを取り上げる。第1点は、“組織記号論説”の基礎となっているパース記号論説について、三角形的図示をすることの是非の問題である。

既述のようにパース自身は自らの説について三角形的図示をしていない。他の論者によりなされてきただけのものである。そこでピエタリネンは、まずこの点について、こうした三角形的図示は、三角形の3頂点の間にいわば独立した3つの関係があるという考え方にたつものとなるが、しかしパースのそもそもの考え方には、こうした考え方はないことを強調する。

すなわちピエタリネンによれば、もともとのパースの考えは、記号の3つの要素の間には1つの関係があるだけであって、それが3要素にいわば枝分かれする関係 (one, irreducibly triadic relation) にあるとするものである。それはパースの言葉でいえば「1つのテリデンティティ (teridentity)」といわれるものであるが、1つのものが3つの構成要素 (components) に枝分かれすることをいうものである。故にパースの記号論は、図示するとすれば、最も原理的には、(三角形的ではなく) 下記の図6のように、3つに枝分かれした1つの線として表わされる。これをピエタリネンは“トライアド (triad)”とよんでいる。ちなみに、パース説について同様の図示をしているものに、ブラジルのグッドウィン (Gudwin, R. R.) がある (G5, p.4)。

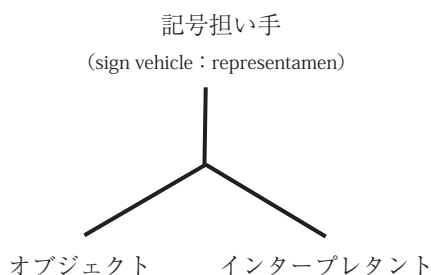


図6：一重のトライアド

(出所：P, p.3)

ところがピエタリネンによると、パース自身のその後の説明では、この点について、オブジェクトの場合、オブジェクトそのものと、その表現者あるいは発信者 (utterers : 以下アッテラーという) とが区別されている。同様にインタープレタントでは、インタープレタントとインタープレターとが区別されている。これを考慮すると、記号関係は、単一の (single) トライアドではなく、二重の (double) トライアドがあるものとして、すなわち図7のような存在と考えられるべきものであるという (P, p.3)。

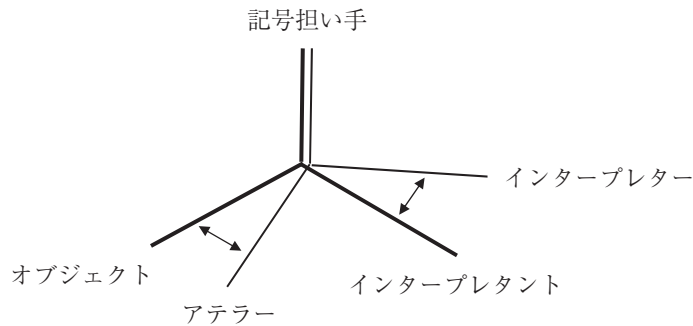


図7: 二重のトライアド

(出所: P, p.3)

これによれば、「記号担い手—オブジェクト—インタープレタント」といういわば通常の関連と、「記号担い手—アテラー—インタープレター」という関連とが区別されるものとなるが、ピエタリネンによると、大略的には、前者は意味論的なものであり、後者はプラグマティック論的なものと位置づけられる。すなわち「記号トライアドには、意味論的なものとプラグマティック論的なものの2者が、同時に存在する」(P, p.4)。

ただしこれは、いうまでもなく、記号関係における物的な側面と人的な側面との2重性を指摘しているものであって、そもそもパースの記号論にこうした2側面があることを論証しているものである。しかしピエタリネンでは、何よりも、これによって「情報、知識、意味(meaning)の3者が内在的に結び合ったもの」という関連にあるものとして規定される根拠とされている(P, p.4)。

つまりピエタリネンは、本来の組織記号論で何よりも究明されるべき基本概念は、その本旨からいっても、この「情報、知識、意味」で、その本義がまず究明されるべきものであるというのである。それにもかかわらず、スタムパーらの“組織記号論説”では、その中心的枠組みとといい(前記の)組織記号論ラダーをみても、この3概念がどのように規定されているかが不明確である。これが“組織記号論説”の具体的批判の第2点である。

この点についてピエタリネンは、この3概念を大略次のように規定されるものとしている(P, p.4)。①情報とは不確実性(uncertainty)を除去するもの。②知識とはトライアディックな記号関係に関連したもの(triadic sign-relate)。④意味とは一定の状況のもとで一定の方法で示される行動習慣(habit of acting)をいう。

この場合記号論で中核的概念とされるものは、一般に、意味であるが、これに対してピエタリネンは“組織記号論説”のように「組織記号の意味を、(人的な)組織的構造のみに限定して考えるのは、理論的誤りである。…というのは、そのようにすると、(人的な)組織構造特性に内在しないところの、(物的なものを含む)多くの(組織内部の人的なもの以外の)外部的(external)な要素や要因、行為がオミットされることになるからである」という(P, p.5)。

これに対していえば、ピエタリネンのいうプラグマティック論的な考え方によると、もともと組織をめぐるレプレゼンタ的な情報によって与えられる記号の意味は、本来、外部的なものであり、プラグマティック的なものである。それが組織で行為習慣に認められている意味である。故に「組織における記号の意味は、当該組織で受け容れられている行動や行為、あるいは行為の仕方の一般的習慣におけるすべての多様性に関連したもの」と規定されるものになる (P, p.5)。

この点に関連して“組織記号論説”で重要な地位を占めるノルムについても批判がなされる。これが具体的批判の第3点である。この点についてピエタリネンは、プラグマティック論的な考え方によれば、「意味のノルム性 (normativity) は行為習慣におけるルールの規制的なものから生まれる」とする。ここで興味深いことは、ピエタリネンが近年における戦略論的思考に言及し、それは旧来からの習慣思考が転化したものと位置づけられるとし、ゲーム理論やそれに類した意思決定理論などは、結局、記号論の意味を高度に明確なものとし、その均衡 (equilibria) を図る方向で一般化する行為習慣があるところで多く起きているとしていることである (P, p.8)。

このうえにたってピエタリネンは、「近年における情報・コンピューター技術の記号論にとって本質的に特徴的なことは、確かにプラグマティック論的なものと人的なものに関するすべての分野における動向のなかに認められるものではあるが、それに立脚しても、記号について“社会的なもの”という要因を特別なものとして論じる必要などはない」と宣している (P, p.11)。

最後にピエタリネンは、「“組織記号論説”は、情報・コンピューターについての人間の顔をした新しい理論として登場しているものであるが、その限界は、まさにこの点に、すなわち単に人間組織という立場にたつだけのものである点にある。…プラグマティック論によれば、記号の関与者は人間だけではない。…記号論とプラグマティック論との観点からすれば、記号論において社会的なものが上位に置かれるようなことはない。つまり、社会的なものが物的なもの (the physical) や自然的なもの (the natural) の上位に置かれることはない」と述べている (P, pp.13-14)。ここにピエタリネンの方法論的立場が改めて明示されている。

VI. 結—組織記号論の有効性について

以上のピエタリネンによるスタムパーらの組織記号論批判は、根本原理的な点に始まり、パス記号論の三角形図示の可能性にまで及ぶ徹底したものであるが、以下本稿では、そのうちの2点についてのみ本稿筆者の見解を述べ、結びの言葉としておきたい。

ピエタリネンによる組織記号論批判で中心的な論点となっているものは、結局、この世における出来事は、根本的究極的には、自然 (物的なもの) と人間 (人的なもの) との協働により決まるのか、それとも人間の意思決定・行為により決まるのかという問題に収斂する。この点について本稿筆者としては、現時点でこれがすべて人間の意思決定・行為により決まると考えるも

のではないが、しかし、地球温暖化などの問題をみると、究極的原因が根本的には人間の決定・行為にあると考えざるをえないものが多い。少なくともこれまでの人間行為の積み重ねが地球の姿を変化させ、作り上げてきた側面が多いことは否定できない。こうした点から考えると、ユネスコもかかわって進展してきたスタムパーらの組織記号論説は、少なくとも現時点における人間行為のあり方として推進されるべきものとする。これに反しピエタリネンのように、現時点で、この世界の出来事は人間と自然との協働ということを改めて強調するものは、人間の責任を軽減させるものとなるのではないかと危惧する。

ちなみに、前記で紹介したアイルランドのコステロは、経営実践上の実態調査に基づいて、現在における情報システムの原理的なあり方としては、スタムパーらの組織記号論が推奨されるべきであり、「情報システムの科学では、情報システムについて、単なるデジタルな人工物 (digital artifact) とみるようなことは止めて、人間相互活動の助けになるシンボリックな代表物 (symbolic representation) としてとらえるよう、考えを改めるようにしなければならない」と述べている (C, p.2)。

以上の根本的視点以外におけるピエタリネンの批判点のうちで、ここでは次の点について、すなわちパース記号論における三角形図示の可能性についてのみ、一言しておきたい。というのは、この問題ではこの点が、實際上比較的大きな（少なくとも量的）地位を占めているからである。

この点に関連しては、パース自身が三角形図示をしていないことが、善きにつけ悪しきにつけ、問題の出発点である。しかしこれはいうまでもなく、何よりもパース説をどのように理論化し解釈するかの問題である。これについてピエタリネンやグッドウィンのように、三角形ではなく、前掲のような1つの線で示されるトライアドとして理解することも可能であるし、前述のミンガース／ウイルコックスのように、あるいはその展開形といえるスタムパーの組織記号論三角形のように示されることも否定されるのではない。これはそれぞれの学問上における自説の提示である。その際それぞれの論者が自説の優位性を力説するのは通例的なことである。

参考文献

- B1: Berger, A. A. (2011). Tourism as a Postmodern Semiotic Activity. *Semiotica*. Issue 183: pp.105-109.
- B2: Blom, I. (2011). The Human Figure in Semiocapitalism, *Kunstskritik*, I. Juli, pp.1-2.
- C1: Chandler, D. (last modified October 22, 2014). Semiotics for Beginners: Signs. 1-30, retrieved 2014, December 20, from: <http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/semiotics02.html>
- C2: Costello, G. (2016). Communication Using Signs: An Empirical Study of a Manufacturing Information System Using Stamper's OS Ladder, *AIS SIGPRAG: Pre-ICIS Workshop 2016 "Practice-based Design and Innovation of Digital Artifacts"*, pp.1-19
- F: Filipe, J. and Liu, K., The EDA Model : An Organizational Semiotics Perspective to Norm-based

- Agent Design, retrieved 2017, October 20, from: <http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.87.6261&rep=rep1&context=1>
- G1: Gazendam, H.W.M. and Liu, K. (2003), The Evolution of Organizational Semiotics: A Brief Review of the Contribution of Ronald Stamper, retrieved 2017, October 20, from: www.orgsem/papers/00.pdf
- G2: Gazendam, H.W.M., Jorna R.J. and Liu, K., (2014), Organizational Semiotics, Round Table Workshop 'An Organizational Semiotics View on Interculturality and Globalization' at the IASS 2004 Conference, pp.1-11.
- G3: Genosko, G. (2008), A-signifying Semiotics, *The Public Journal of Semiotics*, II (I), pp.11-21.
- G4: Genosko, G. (2016), *Critical Semiotics : Theory, from Information to Affect*, London : Bloomsbury.
- G5: Gudwin, R.R., Semionics : A Proposal for the Semiotic Modeling of Organizations, retrieved 2017, October 20, from: <http://www.dca.fee.unicamp.br/~gudwin/ftp/publications/vdf62004.pdf>
- H1: Helmhout, M., Gazendam, H.W.M. and Jorna R.J., The Role of Organizational Semiotics and Social Constructs in the Social Awareness of Simulated Cognitive Plausible Actors, retrieved 2017, October 20, from: citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.87.6261&rep=rep1&context=1
- H2: Hébert, L. (2011). *Tools for Text and Image Analysis: An Introduction to Applied Semiotics; version 3: 2011, (translated)*, 1-201, retrieved 2014, October 22, from: <http://www.signosemio.com/documents/Louis-Hebert-Tools-for-Texts-and-Images.pdf>
- I: IFIP Foreword(2002), The International Federation for Information Processing, in: Liu, K., Clarkle R.J., Andersen, P.B., Stamper, R. and About-Zeid, E. (2002)(eds.), *Organizational Semiotics: Evolving a Science of Information Systems*, Kluwer Academic Publishers.
- J: Jiang, L., Yao, R., Liu, K. and McCrindle, R. (2017), An Epistemic-Deontic-Axiologic(EDA) Agent-based Energy Management System in Office Buildings, *Applied Energy*, vol.205, pp.440-452.
- K1: Kim, J. (1993). From Commodity Production to Sign Production: A Triple Triangle Model for Marx's Semiotics and Peirce's Economics. *Paper Presented at the Annual Convention of SCA —Miami*. 1-34.
- K2: Kockelman, P. (2006). A Semiotic Ontology of the Commodity. *Journal of Linguistic Anthropology*. vol.16: pp.76-102.
- L: Law, J. (2007), Actor Network Theory and Material Semiotics, retrieved 2017, October 20, from: www.heterogeneities.net/publications/Law2007ANTandMaterialSemiotics.pdf
- M: Mingers, J. and Willcocks, L. (2014). Developing an Integrative Semiotic Framework for Information Systems: The Social, Personal and Material Worlds. *Information and Organization*. 24/1: 1-44, retrieved 2014, October 20, from: http://kar.kent.ac.uk/389371/1/1_semiotics.pdf
- N1: Nake, F. (2002), Data, Information, and Knowledge : A Semiotic View of Phenomena of Organization, in: Liu, K., Clarkle R.J., Andersen, P.B., Stamper, R. and About-Zeid, E. (2002)(eds.), *Organizational Semiotics: Evolving a Science of Information Systems*, Kluwer Academic Publishers, pp.41-50.
- N2: Newell, A. and Simon, H.A. (1976), Computer Science as Empirical Inquiry: Symbols and Search, *Communications of the ACM*, vol.19, pp.113-126.
- P: Pietarinen, A., On the Conceptual Underpinnings of Organizational Semiotics from the Pragmatist Point of View, retrieved 2017, October 20, from: www.helsinki.fi/Pietarinen%20On%20the%20Conceptual%20Underpinnings%20of%20Organizational%20Semiotics.pdf
- R: Rao, A. S. and Georgeff, M.P. (1995), BDI Agents : From Theory to Practice, *Proceedings of the First International Conference on Multiagent Systems*, pp.312-319.
- S1: Sastre, R. (2016), An Analytical Methodology for Management Research : Insights from Semiotics, *Studia Oeconomica Posnaniensia*, vol.4, pp.200-218.
- S2: Stamper, R. (2002), Preface : Organizational Semiotics : Evolving a Science of Information Systems, in: Liu, K., Clarkle R. J., Andersen, P. B., Stamper, R. and About-Zeid, E. (2002)(eds.), *Organizational Semiotics: Evolving a Science of Information Systems*, Kluwer Academic Publishers, pp. xv-xxiv.

- S3: Stamper,R. A Semiotic Theory of Information and Information Systems, rapporteur: John Dobson, retrieved 2017, October 20, from: <https://assets.cs.ncl.ac.uk/seminaris/101.pdf>
- S4: Stamper,R., Liu, K., Hafkamp,M. and Ades,Y. (2000), Understanding the Roles of Signs and Norms in Organization, *Journal of Behaviour & Technology*, vol.19, pp.1-19.
- W: Wesolko,D.(2016), The Theory of Affordances, retrieved 2017, October 20, from: www://medium.com/@dane:vesolko/the-theory-of-affordances-cb51fd138b3e
- Ω1: 大橋昭一（2015a）「アクターネットワーク理論の進展過程——物質主義志向的アクターネットワーク理論を中心に」『和歌山大学・経済理論』379号, 41-62頁
- Ω2: 大橋昭一（2015b）「経済理論の記号論的展開過程——構造主義的（伝統的）な記号論を中心に」『和歌山大学・経済理論』381号, 83-102頁
- Ω3: 大橋昭一（2015c）「ブランド理論の記号論的展開過程——近年における記号論立脚のブランド理論の特色」『関西大学・商学論集』60巻2号, 59-79頁
- Ω4: 大橋昭一（2015d）「記号論的転回の進展過程——記号論立脚のトランスモダン論の提起を目指して」『和歌山大学・経済理論』382号, 83-96頁
- Ω5: 大橋昭一（2015e）「商業・マーケティング領域についての記号論的分析の形成過程——その特色はどこにあるか」『関西大学・商学論集』60巻3号, 81-99頁
- Ω6: 大橋昭一（2016）「ツーリズムの記号論的展開過程——わが国における観光概念の規定の前進のために」『和歌山大学・観光学』14号, 13-22頁
- Ω7: 大橋昭一（2017）「記号論に立脚したツーリズム研究の特性について——ツーリズム研究の一層の発展のために」『観光学評論』5巻2号, 165-180頁

Emergence of the Theory on Organizational Semiotics: A Study of its Characteristics

Shoichi OHASHI, Hiroshi TAKEBAYASHI

Abstract

The theory on organizational semiotics has recently been brought to the agenda, with one of the most leading advocates being Ronald Stamper, Professor at University of Twente (NL) and Staffordshire University (UK). This paper examines the emerging process of the theory and proposes the evaluation of its social oriented way of thinking, although some critics oppose its conceptualization from a viewpoint of material semiotics.